
気が付いたら第四次聖杯戦争のサーヴァントに全員憑依していたZ E

てんぷら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気が付いたら第四次聖杯戦争のサーヴァントに全員憑依していた
ZE

【Nコード】

N5700Z

【作者名】

てんぷら

【あらすじ】

もしも、第四次聖杯戦争のサーヴァントに全員が憑依してしまったら。何の前触れもなくサーヴァントとして生きることになった彼らは、原作知識を生かした策謀の戦いに身を投じていく。誇りも分別もなく、蔓延る外道戦法の数々。中身が残念なサーヴァント。踊らされるマスター。

果たして、この力オスな闘いのなかで誰が笑うのやら……。

憑依物語始まるよ！（前書き）

ふと、思いついたのでインスピレーションの涌くままに書いてみました。色々至らぬ点がありますが、どうかよろしくお願いします。

憑依物語始まるよ！

気が付いたら、俺は見知らぬ祭壇に立っていた。

え？ どこココ？

確かさつきまで布団でゴロゴロ転がっていたはずだ。ならば、夢の中なのかな。こういうのを明晰夢って言うんだっけ……？

ふと、周囲を観察してみると、二人の男女が目の前に立っているのが見えた。

彼らの顔は一樣に驚きを示していた。

男はスーツの上にトレンチコートを羽織った日系人。女の方は白い髪に赤い瞳、そしてドレスを着た外国人だ。

……… ちょっと待て。

コイツら見覚えがあるぞ。どう見ても、衛宮切嗣とアイリスフィールじゃないか。

彼らとは画面を隔てた、向こう側の世界でしかご対面したことがない。

つまり、俺の脳みそは夢の世界にアニメキャラを出力したわけ、なにを言いたいのかと言うと、
恥ずかしい………。

「あなたが、アーサー王なの……？」

すると、アイリが震えるように声を漏らした。視線はこちらを向いている、つまり今の台詞は俺に向けて発せられたということだ。

おいおい、それじゃまるで俺がセイバーみたいじゃないか。
アーサー王とか、ハハハ。

結論から言おう。

俺は、かの騎士王になっていた。そして第四次聖杯戦争における『セイバー』のクラスに召喚されたサーヴァントだ。

無論、俺には普通の人間としての記憶しかなく、アーサー・ペンドラゴンとしての思い出なぞ皆無に等しい。

しかし、第四次聖杯戦争で剣を振るうセイバーとしての知識はある。

何の因果があつて、この場に、この役目に、この人物に、降りたつたかは定かではないが、これから残り六組の敵と殺し合いを演じなければならぬ。正直、不安だ。

心の内に抱く畏怖など取り払ってしまえ。

考えなければならぬことは多々あるが、俺には原作知識がある。

タイガールート？ プリズマ イリヤ？ 第五次聖杯戦争？ そんなものは知らないね。

他のサーヴァントぶっ殺して、受肉して、そしてサーヴァントの力で世界征服でもしてやんよお！

まずは切嗣との関係を良好にして、アヴァロン全て遠き理想郷を強奪だ。あれと原作知識があれば、イスカンダルやギルガメッシュなど恐るるに足らんわ！

そうと決まれば、早速マスターに挨拶をしようか。

「問おう。お前が俺のマスターか」

side out

「……勝ったぞ綺礼。この戦い、我々の勝利だ……」

魔術師・遠坂時臣は確信した。この黄金のサーヴァントこそ、自らを成就の道へ導く英雄王だと。骨の髄まで貴族を体現した彼にしては珍しく、その笑みを感熱したように紅潮させていた。傍らで控える寡黙の権化、言峰綺礼ですら、英霊に対する驚嘆をこの身を感じるのだった。それは彼がアサシンを召喚したときとは、違った意味での驚きだ。

(アサシンにも少しは風格を持って欲しかったものだ……)

綺礼は己に仕えるアサシン達の奇行を思い浮かべながら、自嘲するのだった。

そして、この場において、最も心躍らせているのは、よりもアーチャー本人だった。

(ヒロインは皆、僕のハーレム入りだ！)

彼はほくそ笑む。

英雄王として、現出した幸運に感謝しながら。

ケイネス・エルメロイ・アーチボルトはホテルの一室で、椅子に座り、寛いでいた。対面の席に腰を落ち着ける男と、愉快気に語らっていたのだ。

「いやはや、英霊とは一体どんな魂胆を腹の内に抱えたのかと訝しんでいたものだが……。まさか、君のような理解ある戦士が来てくれるとは、私も鼻が高い」

「いえいえ、私も貴方のようなお方が我がマスターとなられて感服の至り。是非とも、貴方の武功に一役買いたい」

柔和に微笑みながら賞賛する美丈夫と、その言葉を堪能し悦に入る魔術師の相對する様は、奇しくも長年の友人が語らうようだった。彼らの談話を、赤毛の麗人ソラウ・ヌアザレ・ソフィアリは、高邁さを漂わせた澄まし顔で静聴している。

「ところで君が聖杯に祈る願望は『第二の生』だったかね」

「正確には、聖杯戦争の後もケイネス殿の雄志を傍らで拝観し続けることに在ります」

「ふん、世辞の巧い奴め」

間桐雁夜は今すぐにも、目の前で吐き気のする笑みを浮かべる老害を血祭りに上げたかった。

間桐臓硯。

戸籍上は雁夜の父である、この下衆から間桐桜を救うために、臓硯の傀儡に成り果てるしかなかったのだ。

しかし、その呪いは叶ったのだ。他ならぬバーサーカーの手によって。

肉片を周囲に撒き散らし、汚らわしい害虫の死骸が散乱している。これが理想を腐らせた外道の成れの果てであった。

驚く雁夜を尻目に、漆黒の鎧を装着したバーサーカーは、膝をつき深く頭を下げる。狂気ではなく礼儀が、そこにあった。そして誓いを口にする。

「雁夜さん。私と共に桜ちゃんを助けましょう」

こうして、総勢七人のサーヴァントに、七人の意思が憑依した。彼らは物語の結末を知るが故に、物語をねじ曲げていくのだ。

憑依物語始まるよ！（後書き）

もう一作の方がメインなので、更新は亀ですが、絶対書ききります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5700z/>

気が付いたら第四次聖杯戦争のサーヴァントに全員憑依していたZ E

2011年12月19日00時52分発行